



個人の発想を大切にし、 多様性を育む授業づくり

1

コロナ禍から見てきたもの

この3年間、コロナ感染症の対応に追われ、学校の授業は激変しました。自宅と学校を結んで遠隔授業ができるようになり、授業中も学習クラウドシステムを活用して児童・生徒はタブレットを使いこなしています。教育のパラダイムシフトが始まっています。

このように指導方法は急激に変容を遂げましたが、再認識したのは、どのように教育のメソッドが進化しても、直接人と対面し交流・協働することは、決しておろそかにできないということです。

2

求められる授業とは

ユニセフのイノチェンティ研究所のレポート(2021)によると、日本の子どもの幸福度は、38か国中で身体的健康は1位でありながら、精神的幸福度は37位でした。一方経済産業省の資料によると、OECD加盟国の従業員のワークエンゲージメント(熱意溢れる社員の割合)は5%、と先進国の中では最も低い国になっています。

このような状況において、経済産業省の「未来人材ビジョン」(2022)は、教育や産業界が一つになって、これからの社会を形づくる若い世代に対しては、次の4つの根源的な意識・行動面に至る能力や姿勢が求められているとしています。

次の社会を形づくる若い世代に対しては、

「常識や前提にとらわれず、

ゼロからイチを生み出す能力」

「**夢中を手放さず一つのことを掘り下げていく姿勢**」

「**グローバルな社会課題を解決する意欲**」

「**多様性を受容し他者と協働する能力**」

そこで、これから求められる能力や姿勢を培う授業とは、個人の発想を大切にできる自由度を高めたり、多様性を受容し協働性を重視したりする方向に転換していく必要があると考えます。これは現在の学習指導要領の方向性と矛盾するものではありません。

次にこれらを踏まえた授業の実践例を2つ紹介します。

3

個人の発想を大切に 自由度を高める

中学生に「なぜ日本の子どもは幸福度が低いのか」と尋ねると、「自由がない」「未来が明るくない」「やることをこなすのに精一杯」と答えます。じっくりと自分のやりたいことや将来を考える時間が必要です。そこで授業では、自分の人生に関わる大切なことを、自分でじっくりと掘り下げ、考えをまとめるような指導計画を立てました。

指導事例1

題材：「18歳成年まであと5年、金融リテラシーを育むためにはどうする？」(中学1年)

今や大人も子どももインターネットを通して多くの情報と接することができます。見えないお金のツールは刻々と変化しています。

生徒は嬉々としてタブレットや本に向かい、自分の興味のあることを調べ出します。自分で考え探究し、生徒相互の間で自発的に生じる自然な対話や協働を伴いながら展開します。さらに一部の生徒は将来こうあって欲しいという仕組みやアイデアも考え始めます。

この課題には1つの正解はなく、人と同じである必要はありません。そして発表会をして学び合います(図2参照)。

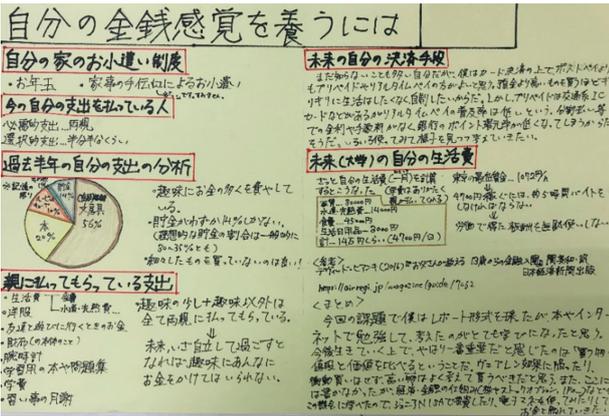
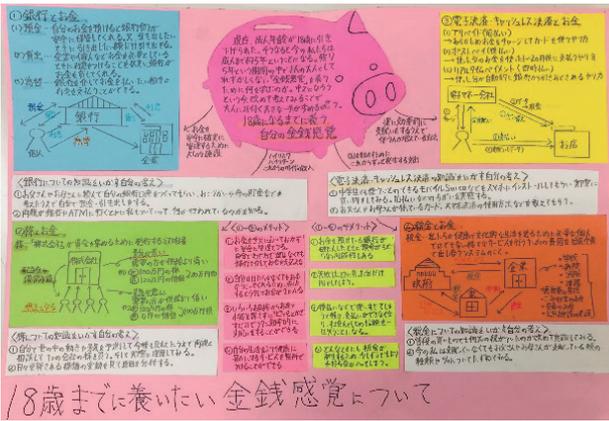


図2 生徒の作品

4 多様性を受容し協働性を育む

多くの子どもたちは学校と家庭が生活の中心です。その中での人間関係の在り方がきわめて大きな影響を与えます。いじめや虐待を受けた経験は、健全な成長に影響を及ぼすことが分かってきました。家庭科は、家族やさまざまな人々との関わりを通して学ぶことを重視しています。積極的に他者に関わる機会を作り、「相手の心を察する力」や「人への信頼感」、そして「自己効力感」を育むことが必要です。少子高齢化し多様化する家族、人間関係が希薄化する社会といわれて久しいですが、人と関わらなければ「共生意識」や「グローバルな課題を解決する意欲」を育むことは難しいと考えます。

* 指導事例 2 *

題材：「身近な高齢者と交流し、その後手作りのプレゼントをしよう」(中学1年)

高齢者と交流する計画を立てて実践し、その後「ふれあい報告」をグループで共有し、自分たちが高齢者にできることを考えプレゼントを製作する(図3~5参照)。



図3 大好きな祖母に「思い出の箱」(お守りつき)

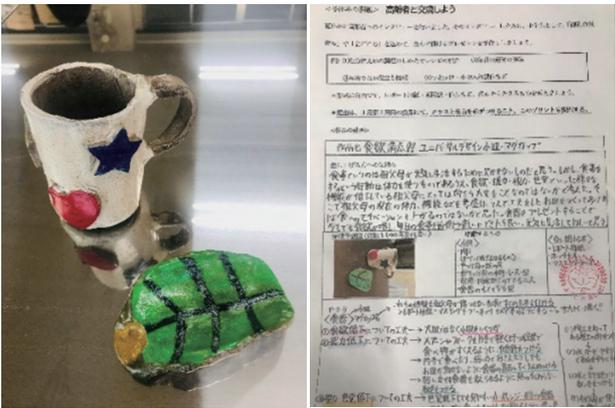


図4 指が不自由な方に「ユニバーサルデザインの食器」

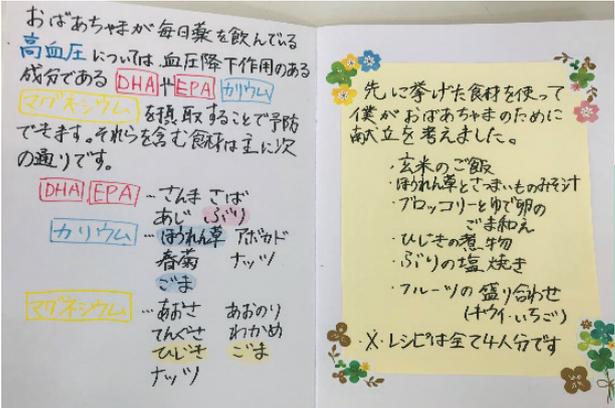
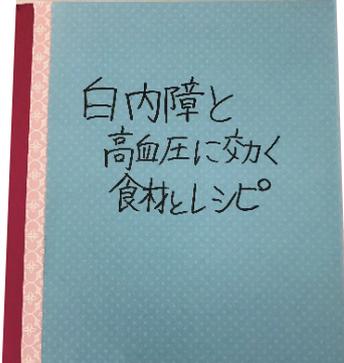


図5 長生きして欲しいから「白内障と高血圧に効く食材とレシピ」

5

子どもの学習改善につながる 評価を

授業が目指す児童・生徒の姿（目標）を明確にしたら、同時に評価の視点も明らかにしていくことが大切です。個人の発想を大切にしながら自由度を高める題材も、多様性を受容し協働性を育む題材も、3観点の評価は可能であり、3観点を支える資質・能力の下位概念*を加味しながら評価規準を明確にし、説明責任を果たせるようにすることが大切です。授業実施後は、児童・生徒の学習改善や、教師の指導改善につながるものにしていくことを基本として、評価は児童生徒の可能性への支援と励ましの気持ちを根底に、子どもの個性に寄り添い、更なる学びと希望に繋がるよう、タイミングも考慮して行います。

*例えば道徳科の22の指導内容項目や前述の未来人材ビジョン「56項目から成る人の能力」p18.20

引用・参考文献

- 1 日本ユニセフ協会「イノチェンティ研究所レポートカード16」2021
- 2 経済産業省「未来人材ビジョン」PDF版2022年5月。P77に筑波大学附属中学校の「ベジミート（植物肉）の探究教材」掲載

元筑波大学附属中学校副校長。その間教育大学協会中学校部会会長、全国国立大学附属学校連盟中学校副校長部会会長を経て、現在は、日本女子大学、鎌倉女子大学、筑波大学附属中学校にて非常勤講師。

小林 美礼（こばやし みれい）

